

新幹線で東京駅につき、山中湖行きの東名バス乗車にしばしの待ち時間があった。わたしたち夫婦は、八重洲の商店街を歩きながら、ベンチをさがしていた。背中のバックパックは重く、足も疲れている。とにかく休憩したかった。

ところが、どこをさがしてもベンチがない！ はじめのうちは、それでもどこかに絶対あるはずだと希望をもってさがしていた。そのうち、なんともいえない疎外感につつまれた。飲食店はどこも満席で、ブティックやお土産店にも人があふれている。その間をぬって、両手に重い荷物をもった旅行客が、わたしたちと同じように彷徨っているすがたが目にはいった。田舎のじいちゃん、ばあちゃんたちもうろろうしている。

30分も歩きまわっただろうか、わたしたちはついに力つきて、地下におりる階段に腰をおろして、一息ついた。なんと、即座にガードマンふたりが駆け寄ってきて、すみやかに立ち去ってくれと言う。なんでも、掲示板にちゃんとルールが書いてあるから、守ってほしいと遠くの壁の方を指さした。

夫が「待合室もないし、ベンチもない。どこで休んだらいいのか？」ときいたが、とにかくルールだから、すみやかに立ち去ってくれとの一点ばりだ。

わたしは、不愉快さに立ち上がったが、夫は立ち去る必要はないと、がんとして動かない。しかし、虚しい時間だけが過ぎていく。なんとも後味の悪い夕方だった。ああ東京駅よ、あなたはもう、鉄道の駅舎ではなくなったね！